

心を動かすことがアートの本質 — 企業や地方自治体との多様な連携で 社会課題の解決に挑む

東京藝術大学長 日比野克彦
ひびの かつひこ



東京藝術大学は、2024年で開校137年を迎える。鉄道やガス灯などが整備された文明開化の頃、西洋を見習い、学び取りたいという近代化の潮流の中で、本学は開校した。しかしアートは本来、どこから学ぶというよりは、生活の中から湧き出るもの、例えば、身近な人の死に際しての「悲しい」と思う感情、共に夕陽を見て「美しい」と感じる情緒など、人間の感情こそがアートの原動力、あ

らゆる行動の源泉になっている。作品「アート」ということではなく、その作品は、観た人の心を動かすスイッチ、きっかけといえる。心を動かすことそのものがアートの本質なのである。

気候変動や戦争、教育、ジェンダーなどの大きな社会の動きに対して、個々人はその行動・認識を変えることを迫られている。SDGsという目標設定の仕組みは有効だが、

残念ながらその中に芸術という要素が組み込まれていない。紛争や貧困を真に解決し、平和を実現したいのなら、人の心を動かすことこそ重要で、それが継続的な行動変容につながるはずだ。アートのためのアートではなく、様々な社会課題に取り組むことで、解決の方向に動き始める。それがアートの力ではないか。本学にとって、こうした捉え方を理念化していくのは革新的なことでもあり、諦めず

に取り組みたい。人間の感情は一人ひとり異なり、アートがどのような作用をもたらすかも百人百様で、目標や実績も数値化しにくい。アートには完成はなく、プロセスも含め発信し続けることが大事だと思っている。

多様な主体と連携した アートプログラムを推進

本学は、企業や地方自治体など、多様な主体と連携したアートプログラムを進めている。

2023年から熊本市の職員向けにDORR (Diversity on the Arts Project) というプロジェクトを実施している。DORRは、社会人を対象に大学のもつ専門知を社会に開き、「アート×福祉・ケア」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材の育成を目指すものだ。アートと福祉には、「人と人をつなぐ」という共通項がある。2017年の開講以来、多くの履修生を輩出してきたが、今回も学生や社会人120人がこのプログラムを履修している。

的な方向性や概念を肌で感じられる展示とする試みだ。多様性がある社会づくりを模索していくうえで、行政の中にこうした「肌で感じる」という視点を取り入れるのは、大きな効果があると期待している。



自治体は、住生活や健康、災害、社会保障、その他市民が生活するうえでの課題を最も把握している。その窓口が市役所といえるだろう。このプロジェクトが、様々な社会課題の解決に向けて、よりよいアプローチとなることを期待している。また、活動は授業のみにとどまらない。地方自治体は施政方針を定め、それを具体的な施策に落とし込む総合計画を策定するが、その計画を展覧会にして伝えていく「総合計画展」を実施した。文章を読んでも計画を理解するという以外に、計画の全体

企業との連携では、みずほフィナンシャルグループと包括連携協定を締結した。みずほフィナンシャルグループは、2023年、企業理念を再定義し、「ともに挑む。ともに実る。」というパーパスを発表した。パーパスを体現する取り組みの一つとして、ともに活動を進めている。価値を交換するための共通単位としての通貨と、人々の価値観を交換し、ものの見方や思考を変えていくことを得意とするアート。金融とアートは一見かけ離れたものと思うかもしれないが、実は、人をつなげるという共通点を持つ。ネットバンキングが発達するにつれ、顧客との接点、接客を通じて視点が減っていくが、顧客像を想像する活動こそ重要で、銀行が単なる数字を管理する会社ではなく、人間の幸せとともに生きる、ともにつくるといった観点から、従業員



アートこそが 人が生きる力を引き出す

人類が描いた最も古い絵は、フランスのラスコーなどの洞窟で見つかった5〜2万年前の壁画といわれる。実際に見てみると、描かれた動物の躍動感に感動すると同時に、美しいと感じる。2万年前の絵に感動できることにも驚く。科学は知識や技術を次世代に継承する中で進化するが、個々人それぞれの感性は引き継ぐことが難しい。しかし2万年前の絵は、本来人間が持っている生きる力を引き出すことができるのだ。

ている。企業の経済活動の中に文化・芸術を取り入れるなど、経済とアートは一体化したものである。

アートは生きる力である。アートこそが人間の生きる力を引き出してくれるのだ。政治や経済は、人々が安心して生きる土台を整備するが、生きる根源にアートがある。それを意識しながら、日本社会の施政、経済を支える土壌ができればと考えている。

(インタビューに基づき編集部で再構成)

向けのワークショップなど、様々なプログラムを進めている。アートの役割は商品デザイン、美しく見せる意匠などの技巧的な側面、広告やものづくりなどにとどまらない。今後も人の心を動かすというアートの役割に気がつき、魅力を感じてくれる企業との連携を進めたい。

日本は長い歴史と文化を持つ。日本が海外からどう見られているか。自動車や機械工業など産業への評価が高い一方、根源的なリスペクトは日本で培われた文化面にある。自分たちの地域・国をより豊かにしたいなら、文化をもっと活用していくアプローチがあってもよいはずだ。文化と経済とは二分して捉えがちだが、それぞれに携わる人々に交わりがないわけではなく、同じ空間、社会を共有し

Profile

日比野克彦

1958年、岐阜県生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、同大学院修士課程修了。岐阜県美術館館長、熊本市現代美術館館長。日本サッカー協会社会貢献委員長。大学在学中に段ボール作品で注目を浴び、デザイン、絵画、舞台美術、地域を巻き込んだアートプロジェクトなど多岐にわたり活動。2022年4月、6年の任期で東京藝術大学の学長に就任